



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | スタイル切換えと切換え能力の発達 : 青森県弘前市方言話者の目的表現を例に                                     |
| Author(s)    | 阿部, 貴人  |
| Citation     | 阪大日本語研究. 2006, 18, p. 23-48   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/3603">https://doi.org/10.18910/3603</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# スタイル切換えと切換え能力の発達 —青森県弘前市方言話者の目的表現を例に—

Style-shifting and development of the shifting ability by  
Hirosaki dialect speaker : The case of purpose expressions

阿部 貴人  
ABE Takahito

キーワード：切換え、目的表現、スキル、自動化

## 【要旨】

青森県弘前市方言話者の目的表現の切換えから、方言と共通語の切換えにおける処理とそのスキル化、および共通語切換え能力の発達について分析・考察した。その結果、以下のことが明らかとなった。

- (1) 方言形と共通語形を切換えるスキル化に先立ち、方言を抑制するスキル化の段階が存在する。
- (2) AKの使用形式の推移は、U字型行動を示す。すなわち、共通語と同様の形式を使用する段階から、中間方言体系へ再構成されることによって過剰修正された形式を使用する段階に入り、再び体系が再構成されることによって共通語と同様の形式を使用する段階に至る。
- (3) 方言形と共通語形の切換えがスキル化される過程で、方言と共通語の両体系が相互に影響を与え合いながら、それぞれの体系を構成していく。

また、共通語切換え能力の発達に関して、

- (4) 方言形式が表出される時期から、方言を抑制しようとする時期、方言形と共通語形の切換えがスキル化される時期へ至る過程を、スキル化と再構成とを関連させたモデルとして提出した。

## 1. はじめに

共通語の知識を尋ねる調査（方言文を共通語に訳してもらう、など）や手紙などの書きことばでは、方言の形態や表現を用いず、共通語形のみを回答／使用する話者がいる。音声・音韻に関しても、方言談話では方言音声を使用しながらも、語彙リストの読み上げな

ど、共通語音声の生成能力も持っている場合がある。しかしながら、非同一方言話者と実際に会話をするという自然談話に近い場面を設定すると、共通語の要素に切換えられずに、非共通語的な要素で話すことがある。つまり、ある変種の体系を「知っている」と「使える」ことは異なるのである。本稿では、共通語を第一変種としない話者の、共通語を「知っている」ことを「共通語能力」と呼び、「使える」ことを「共通語切換え能力」と呼ぶ。

このような話者の談話調査を継続的に行うと、初期には切換えられずに表出された方言的要素が、時期を経るにしたがって共通語へ切換えられる様相が観察される。これは共通語を習得した結果ではない。なぜなら、共通語能力は初期から有していたからである。つまり、共通語能力を活用できるようになったということ、言い換えれば共通語切換え能力が発達したと考えられるのである。

本稿では、青森県弘前市方言話者の共通語切換え能力の発達について、目的表現を取りあげて分析・考察する。

まず、次節で共通語切換え能力と関連する理論的背景について概観する (§ 2.)。次に調査の概要を示し (§ 3.)、本稿が分析対象とする目的表現を整理する (§ 4.)。同じ方言を母方言とする話者、母方言を異にする話者との継続的な談話調査の結果から、共通語切換え能力の発達について分析・考察し (§ 5.)、さらに、談話調査の分析・考察を基に、共通語切換え能力の発達モデルを提示する (§ 6.)。

## 2. 共通語切換え能力と自動化

共通語切換え能力が発達するとは、方言と共通語を切換えるスキルが自動化されることを意味していると考えられる。本稿で対象とする話者は共通語能力は持っているものの、共通語談話の運用は共通語と異なっており、target として共通語を目指している。共通語切換え能力という能力を獲得・発達させるという点で第二言語習得者と並行的な処理を行う可能性がある。すなわち、第二言語学習者が目標言語を習得していく過程でみられるのと同様に、話者が方言と共通語の切換えというスキルを遂行するうえで、処理過程に注意を払いながら行われる統制的処理 (controlled processing) を行っていた段階から、それがルーティン化された自動的処理 (automatic processing) を行う段階へと移行すると考えられるのである (McLaughlin, Rossman & Mcleod 1983)。あるいは、Anderson (1983) のスキル習得論のように、事実や事物についての知識である宣言的知識 (declarative knowledge) が、手続化 (proceduralization) を経て、無意識的に何かが出来るという技

能を指す手続的知識 (procedural knowledge) へ移行すると考えられるのである。言うなれば、「知っている」段階から「使える」段階へとスキルを発達させていくことになる。スキルが発達し、「使える」段階に至ることを本稿ではスキルの自動化と呼ぶことにする。方言と共通語の切換えに関して、スキルとその自動化という観点から考察した先行研究は、管見の限り見当たらない。

本稿では青森県弘前市方言話者の目的表現の切換えを基に、「知っている」段階から「使える」段階へとスキルを発達させていくこと、つまり方言と共通語を切換える処理が自動化され、共通語切換え能力が発達する過程を明らかにする。青森県弘前市方言話者を対象とするのは、共通語（あるいは標準語）に対して強い志向を持っている（佐藤 1993）ことにより、非津軽方言話者との会話では共通語を使おうとする積極的な態度がみられるためである。また、目的表現を分析項目とするのは、津軽方言の1つの形式が2つの共通語形式に対応しているためである。方言と共通語の形式と意味・用法が一対一に対応している場合には、対応置換することで共通語へ切換えることができる。しかし、津軽方言の目的表現は1つの方言形式を2つの共通語形式に対応させるという、より複雑な処理が必要となるためである（§ 4.）。

次節では、対象とするインフォーマントの共通語能力を確認すること、および共通語切換え能力の発達を観察することを目的にデザインした調査の概要を示す。

### 3. 調査概要

調査は、共通語能力を確認するために行った (A) 面接調査と、共通語切換え能力の発達を観察することを目的に行った (B) 談話調査の2種類である。

まず、それぞれの調査の目的とインフォーマントの情報を示し（§ 3.1.）、次に面接調査の概要（§ 3.2.）、談話調査の概要（§ 3.3.）を示す。

#### 3. 1. 調査の目的とインフォーマント

まず、調査の目的とインフォーマント情報を示す。(A) 面接調査および (B) 談話調査の調査の目的は以下の通りである。

(A) 面接調査：

(A-1) 共通語の形式・表現を知っているかを確認する

(A-2) 方言として使用される形式を確認し、(A-1) の結果と合わせてバリエーション関係を把握する

(A-3) 方言と共通語を話そうとする談話で、どのような形式を使用すると意識しているかを確認する

(B) 談話調査：

(B-1) 方言談話と共通語談話の比較から、面接調査で確認されたバリエーションがどのように切換えられているのか、分析する

(B-2) 方言談話・共通語談話の継続調査から、それぞれの形式の使用がどのように変化・変容するのかを分析する

(A-1) は共通語能力を確認することになる。(A-2) は共通語形や伝統的な方言形を確認することに加え、目的表現で(意識の面で)使用可能な形式の全てを確認するために行った。この調査によって、共通語形でも伝統的な方言形でもない形式が(意識の面では)使用可能であることを確認することになる(§ 4.1.2. で述べる)。(A-3) は方言談話・共通語談話において(A-1) と(A-2) で確認されたバリエーションをどのように使用していると意識しているかを確認することになる。

(B) の談話調査では、(A) の面接調査で確認した形式が、異なったスタイルにおいてどのように使用されるのか(B-1)、またその使用がどのように変化・変容するのか(B-2)を観察することを目的とする。スタイルは書きことばや話しことばといった媒体、参与者・話題・状況などの要因によって切換わる。その切換えは、あるバリエーションが使用される割合が換わるという場合や、使用されるコード・体系が切換えられる場合もある。本稿では、話しことばにおいて、参与者が異なることによって切換わるスタイルについて、方言形と共通語形というコードが切換わることに注目し、その変化・変容も含めて分析するものである。

分析対象者は、青森県弘前市生え抜きの話者1名(以下、AKと呼ぶ)である。インフォーマント情報を表1に示す。

表1：話者AKに関する情報

| 話者記号 | 年齢                  | 性別 | 職業     | 居住歴       |
|------|---------------------|----|--------|-----------|
| AK   | 43～50 <sup>*1</sup> | 女性 | 主婦→パート | 0-：青森県弘前市 |

\*1 1998年8月～2005年6月までの約7年間に渡って調査を行った。

AKには外住歴がなく(修学旅行等で数回県外に出たことがあるのみであり)、調査開始まで共通語を母方言とする話者をはじめ、非津軽方言話者との接触は極めて少なかった。小学校時代に「方言札」ならぬ「方言カード」を経験しており<sup>1)</sup>、非津軽方言話者に対しては共通語を使おうとする強い志向がある。

### 3. 2. 面接調査の概要

AK に対して行った面接調査は以下の 3 種である。

- (a) 共通語訳調査：方言文を示し、共通語訳してもらう
- (b) 方言訳調査：共通語文を示し、方言訳してもらう
- (c) 切換え意識調査：方言形式と共通語形式の切換え意識を尋ねる

(a) は § 3.1. (A-1) 「共通語の形式・表現を知っているか、確認する」ために、(b) は § 3.1. (A-2) 「バリエーション関係を形成している形式を把握する」ことを、(c) は § 3.1. (A-3) 「方言と共通語を話そうとする談話で、どのような形式を使用すると意識しているかを確認する」ことを目的に行った。なお、(a) ～ (c) の調査は、§ 3.3. に示す談話調査の第 1 期とほぼ同時期に行っている。

### 3. 3. 談話調査の概要

§ 3.1. (B-1) (B-2) を明らかにするために、話者 AK と津軽方言話者 MA・非津軽方言話者 OM との会話を継続的に収集する談話調査を行った。表 2 に AK の話し相手である同一母方言話者 MA と、母方言の異なる話者 OM に関する情報、表 3 に継続的に収集した談話の情報を示す。なお、継続調査は、分析のために第 1 期～第 5 期に分けている。この分類は他の項目（否定条件節や有声化現象の切換えなど）の結果も合わせ、量的な分布の違いによって分類したものである。

表 2：話者 MA・OM に関する情報

| 談話の種類 | 話者記号             | 年齢                  | 性別 | 居住歴                          |
|-------|------------------|---------------------|----|------------------------------|
| 方言談話  | MA <sup>*1</sup> | 65-72 <sup>*4</sup> | 女性 | 0-：青森県中津軽郡西目屋村 <sup>*2</sup> |
| 共通語談話 | OM <sup>*3</sup> | 24-31 <sup>*4</sup> | 女性 | 0-18：山口県 18-22：東京都 22-：大阪府   |

\*1 AK の母親      \*2 ただし、出稼ぎのため埼玉・広島へ数ヶ月間居住を数年間経験している

\*3 AK の息子の婚約者→その後、AK の息子の配偶者

\*4 1998 年 8 月～2005 年 6 月までの約 7 年間に渡って調査を行った。

表3：談話情報

| 期   | 方言談話 | 共通語談話   | 調査年月   |
|-----|------|---------|--------|
| 第1期 | MA1  | OM1     | 1998.8 |
|     |      | OM2     | 1999.8 |
| 第2期 | MA2  | OM3-10  | 2000.3 |
|     |      | OM11    | 2001.8 |
| 第3期 | MA3  | OM12-14 | 2002.8 |
|     |      | OM15    | 2003.3 |
| 第4期 | MA4  | OM16    | 2004.3 |
|     |      | OM17    | 2004.8 |
| 第5期 | MA5  | OM18    | 2005.3 |
|     |      | OM19    | 2005.6 |

調査形式はAKとMA／OMの一対一の会話（調査者は同席していない）である。なお、以下では津軽方言話者MAとの会話を「方言談話」、非津軽方言話者であるOMとの会話を「共通語談話」と呼ぶことにする。

5節では、本節で示した面接調査・談話調査の結果の分析から、話者AKの切換えと自動化の発達について分析・考察する。

#### 4. 分析対象項目

本節では、本稿が扱う目的表現の用法を示す。本稿で扱う目的表現は、動詞文で、主節が表わす動作や事態の「目的」を表わし、

(A) 移動動作とその目的を同時に表わす（＝例文（1））

(B) 必要・使用・有用を表わす述語の補語として目的を表わす（＝例文（2））

という2つの用法（前田1995）を対象とする（この二用法に限定することについては§5.1.2.を参照されたい）。

(1) 映画を見に梅田に行った。

(2) この機械は字幕付きの映画を見るのに使う。（前田1995：451）

共通語では、(1)は「動詞連用形＋に」、(2)は「動詞終止形＋のに」となる。以下、便宜的に共通語で「動詞連用形＋に」が用いられる移動動作とその目的を表わす文を「しに文」、「動詞終止形＋のに」が用いられる必要・使用・有用を表わす述語の補語として目

的を表わす文を「のに文」と呼ぶ。

青森県弘前市方言では、上記(1)(2)の両用法とも「動詞終止形+ニ」を用いる<sup>2)</sup>。

(1') 映画を見ルニ梅田に行った。

(2') この機械は字幕付きの映画を見ルニ使う。

当該方言の「動詞終止形+ニ」は共通語が表す例文(1)(2)の用法を1つの形式が担っていることになる。当該方言から共通語へ切換える際には、「動詞終止形+ニ」という方言の構造を「しに文」の場合は「動詞連用形+に」、「のに文」の場合は「動詞終止形+のに」のように、用法別に切換える必要がある。しかしながら、§ 5.2. で述べるように、AKは方言の構造と、共通語の構造を独自の対応ルールによって切換え、中間方言的な表現を作りあげるのである。ただし、作りあげられた中間方言的な表現は、静的に固定されるのではなく、時期を経るにしたがって共通語へ切換える段階へと推移していく。

なお、ここで本稿での形式の表記について示しておく。本稿で注目する形式は以下のように3つのタイプがあり、それぞれ次のように表記する。

・形態・用法とも共通語と同じ表現：

動詞も含めてひらがなで表記する(例：「勉強するのに」)。

・伝統的な方言形：

カタカナで表記し、下線を付す。その際、当該の助詞だけでなく動詞(の活用に関わる部分)もカタカナで表記する(例：「勉強スルニ」)。

・形態は共通語と同じであるが、用法が共通語と異なる表現：

カタカナで表記し、二重下線を付す(例：勉強シニ)。

したがって、ひらがな/カタカナの表記によって共通語と同様の表現か方言的な表現かを、下線の種類によって伝統的な方言形か共通語形ではあるが用法が共通語と異なる形式であるかを区別する。

次節からは、面接調査の結果を共通語訳調査(§ 5.1.1.)、方言訳調査(§ 5.1.2.)、切換え意識調査(§ 5.1.3.)の順に提示し、次に談話調査の結果(§ 5.2.)を示す。

## 5. 分析と考察

### 5. 1. 面接調査の結果

#### 5. 1. 1. 共通語訳調査

共通語訳調査は、§ 3.1. の(A-1)「共通語の形式・表現を知っているか、確認する」ことを目的として行った。つまり、§ 1. の共通語能力を確認することを目的としている。

方言形式である「動詞終止形+ニ」を用いた、共通語で「動詞連用形+に」が用いられる文(=「しに文」)、「動詞終止形+のに」が用いられる文(=「のに文」)をそれぞれ15文ずつ提示し、共通語訳してもらった。以下に結果の一部を示す(【 】内にAKの回答を示す(§ 5.1.2.、§ 5.1.3.も同様)。なお、実際の調査ではAKの理解の便を考慮して当該形式以外も方言形式とした)。

- (3) スーパーへ買い物を買スルニ行った。 【しに】  
 (4) つい飲ムニ行ってしまう。 【飲みに】 (以上、「しに」文)  
 (5) これは野菜の皮をムクニ使う。 【むくのに】  
 (6) この辞書は勉強スルニ役立った。 【勉強するのに】 (以上、「のに」文)

AKは「しに」文、「のに」文の各15文(計30例)のいずれも共通語と同様の形式を回答した。このことから、AKは、「しに文」には「動詞連用形+に」を、「のに文」には「動詞終止形+のに」を使用するという共通語の知識を持っている、つまり、共通語能力を有していると考えられる。

### 5. 1. 2. 方言訳調査

方言訳調査は§ 3.1.の(A-2)「バリエーション関係を形成している形式を把握する」ことを目的に行った。調査は§ 5.1.1.の共通語訳調査から数日をおいて行った。

§ 5.1.1.の文の共通語文を提示し、方言訳してもらおう(方言として使用できるものを尋ねる)という方法をとった。以下に調査結果の一部を示す。

- (7) スーパーへ買物をしに行った。 【スルニ／スルノニ】  
 (8) つい飲みに行ってしまう。 【飲ムニ／飲ムノニ】  
 (9) これは野菜の皮をむくのに使う。 【ムクニ／ムキニ】  
 (10) この辞書は勉強するのに役立った。 【勉強スルニ／シニ】

(7)(8)のスルノニ・飲ムノニ、(9)(10)のムキニ・シニは、従来の方言では見られない表現である。AKも「本当(の使い方)ではないが使えるくはない」と自省する。これは、従来の方言ではなく、共通語でもないが実際には使っているかもしれない(使ってしまうかもしれない)ということの意味していると考えられる。AKがこのような表現を形成したメカニズムは図1のように示すことができる。まず、方言と共通語の対応関係に関する知識として二つのルールを持つ。「しに文」における方言「動詞終止形+ニ」を仮に「動詞終止形+ニ1」、「のに文」における方言「動詞終止形+ニ」を「動詞終止形+ニ2」とすると、「動詞終止形+ニ1」が「動詞連用形+に」と対応するというルール(ルール1)と、「動詞終止形+ニ2」が「動詞終止形+のに」と対応するというルール(ルール2)を持

っていることになる（図の「対応ルール」）。この二つのルールを基に、共通語形を使用しようと意識する談話では「のに文」には「動詞終止形+のに」を、「しに文」には「動詞連用形+に」を使用するといった切換え意識を持つ（図の「切換え意識」）。

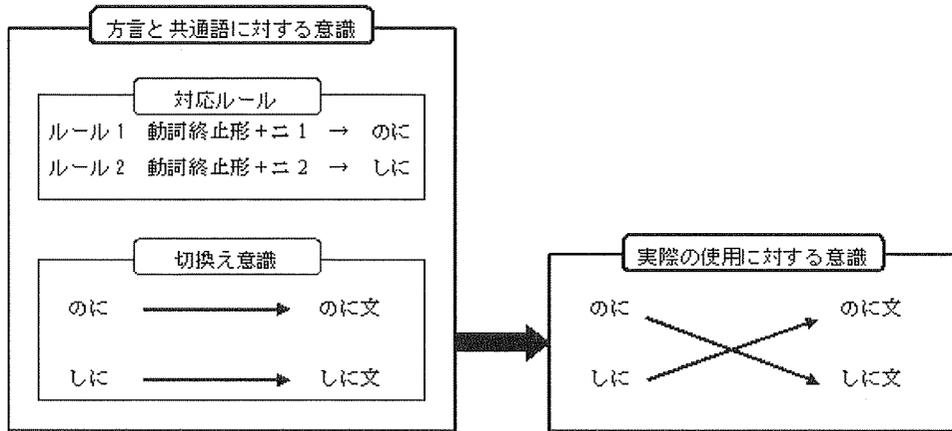


図1：非対応形を形成するメカニズム

共通語切換え能力の高い話者であれば、「しに文」か「のに文」といった用法に合わせて、（半ば無意識的に）方言の「動詞終止形+に」を「動詞連用形+に」「動詞終止形+のに」に切換えられると考えられる。しかし、実際に形式を使用する場面では対応ルールを逆転させた表現を使用してしまうと意識するのである（図の「実際の使用に対する意識」）。

ただし、§ 5.2. で述べるように、この対応ルールが逆転した表現は、調査開始直後の方言談話では全く使用されていない。さらに、この表現が使用されるのは、共通語談話が先行している。したがって、この表現は「方言で使用してしまう」と意識されながらも、（ある時期までは）実際に方言として使用される表現ではなく、また、必ずしも方言として使用されるとは限らない。

以下、便宜的に、共通語と同様に「しに文」に使用した「動詞連用形+に」、「のに文」に使用した「動詞終止形+のに」を対応形と呼び、「しに文」に使用した「動詞終止形+のに」、「のに文」に使用した「動詞連用形+に」を非対応形と呼んでおく。

なお、ここで本稿が対象とする目的表現を§ 4のように（A）移動動作とその目的を同時に表わす用法、（B）必要・使用・有用を表わす述語の補語として目的を表わす用法に限定したことについて述べておく。（A）（B）の二用法は、主節の述語に制限がある。（A）は「行く、来る、でかける」といった移動動作を表す述語に限られ、（B）は「要る、必要だ、

費やす」といった〈必要〉、「使う、用いる」といった〈使用〉、「役立つ、便利だ、大切だ」といった述語に限られる。このような述語の制限が小さいものとして「ために」がある。当該方言では、共通語で「動詞終止形＋ために」の用法でも「動詞終止形＋ニ」が使用される(11)。しかしながら、この用法では「動詞終止形＋のに」を使用する非対応形(11')、「動詞連用形＋ニ」を使用する非対応形(11'')を「使用できる(してしまう)」といった内省は得られず、また、実際に使用されることもない(方言談話では「動詞終止形＋ニ」、共通語談話では「動詞終止形＋ために」といったカテゴリカルな切換えを行う)。

(11) 旅行に行くニ、休暇を取る。

(11') 旅行に行くノニ、休暇を取る。

(11'') 旅行に行キニ、休暇を取る。

したがって、非対応形の使用は(A)(B)という二用法に限られていることになる。さらに、共通語では「動詞終止形＋ために」は(A)(B)の用法でも使用されるが((12)(13))、AKは方言談話・共通語談話のいずれにおいても(A)(B)の用法では「動詞終止形＋ために」を使用しない。

(12) 映画を見るために、梅田に行った。

(13) この機械は字幕付きの映画を見るために使う。

ここから、AKの動詞文における目的表現は、(A)(B)の用法では「動詞終止形＋のに」もしくは「動詞連用形＋に」を使用し、それ以外の述語では「動詞終止形＋ために」を使用するという使用体系であると考えられる。以上の、非対応形が使用されずカテゴリカルな切換えを行うこと、(A)(B)では「動詞終止形＋ために」が使用されないことから、「動詞終止形＋ために」は分析の対象外としたのである。

### 5. 1. 3. 切換え意識調査

切換え意識調査は、§ 3.1.の(A-3)「方言と共通語を話そうとする談話で、どのような形式を使用すると意識しているかを確認する」ことを目的に行った。

調査の方法は、共通語訳調査で示した文を共通語訳調査・方言訳調査で回答された表現と共に提示し、話し相手OMに対して使用する表現を選択してもらうという形式をとった。以下に調査例を挙げる(実際の調査では、選択する表現はすべて片仮名で表記した)。

(14) スーパーへ買い物を {しに/スルニ/スルノニ} 行った。

方言談話での使用意識【スルニ】、共通語談話での使用意識【しに】

(15) つい {飲みに/飲ムニ/飲ムノニ} 行ってしまう。

方言談話での使用意識【飲ムニ】、共通語談話での使用意識【飲みに】

(16) これは野菜の皮を {むくのに／ムクニ／ムキニ} 使う。

方言談話での使用意識【ムクニ】、共通語談話での使用意識【むくのに】

(17) この辞書は {勉強するのに／スルニ／シニ} 役立った。

方言談話での使用意識【スルニ】、共通語談話での使用意識【するのに】

以上は、以下のようにまとめられる。

方言談話：しに文では「動詞終止形+ニ」を使用する（「動詞終止形+のに」は使わない）、のに文では「動詞終止形+ニ」を使用する（「動詞連用形+に」は使わない）

共通語談話：しに文では「動詞連用形+に」を使用する（「動詞終止形+のに」は使えない）、のに文では「動詞終止形+のに」を使用する（「動詞連用形+に」は使えない）

以上のように、AKは、方言談話では伝統的な方言形を使用し、共通語へ切換える際には共通語と同様の形式（＝対応形）を使用すると意識している。

#### 5. 1. 4. 面接調査のまとめ

本節をまとめると、以下のようになる。

- (a) AKは共通語の「しに文」では「動詞連用形+に」を、「のに文」では「動詞終止形+のに」を使用することを知っている。ここから、AKは共通語能力を有していると考えられる（§ 5.1.1.）。
- (b) ただし、方言談話では非対応形も使用できると内省する（§ 5.1.2.）。
- (c) 共通語を使おうとする場面では、対応形のみを使用すると意識する（§ 5.1.3.）。

#### 5. 2. 談話調査の結果

本節では、§ 3.1. の (B-1) 「方言談話と共通語談話の比較から、面接調査で確認されたバリエーションがどのように切換えられているのか」、(B-2) 「方言談話・共通語談話の継続調査から、それぞれのスタイルがどのように変化・変容するのかを分析する」ことを目的に行った談話調査の結果を示し、分析・考察する。具体的には、§ 5.2.1. で第1期～第5期の結果をまとめ、§ 5.2.2. で共通語談話における伝統的な方言形と共通語形の切換えについて、§ 5.2.3. で方言談話・共通語談話における非対応形の推移について、§ 5.2.4. で方言談話における共通語形の使用について分析・考察する。

### 5. 2. 1. 第1期～第5期の結果

分析に際し、継続調査の結果を、§ 3.3. の表3のように、第1期から第5期に分類した。方言談話と共通語談話について、時期ごとに形式の分布を示したものが表4～表8である。なお、表内の枠囲みは、§ 5.1.2. で分析した、従来の方言でも共通語でもない中間方言的な表現（＝非対応形）であることを示す。

表4：第1期の方言談話／共通語談話における分布

| 方言談話               | しに文 | のに文 | 計  | 共通語談話 | しに文 | のに文 | 計  |
|--------------------|-----|-----|----|-------|-----|-----|----|
| 連＋に* <sup>1</sup>  | 7   | -   | 7  | 連＋に   | 6   | -   | 6  |
| 終＋のに* <sup>1</sup> | -   | 3   | 3  | 終＋のに  | -   | 2   | 2  |
| 終＋ニ* <sup>1</sup>  | 1   | 3   | 4  | 終＋ニ   | 3   | 12  | 15 |
| 計                  | 8   | 6   | 14 | 計     | 9   | 14  | 23 |

\*1 「連＋に」は「動詞連用形＋に」、「終＋のに」は「動詞終止形＋のに」、「終＋ニ」は「動詞終止形＋ニ」を指す。以降の表も同様。

表5：第2期の方言談話／共通語談話における分布

| 方言談話 | しに文 | のに文 | 計  | 共通語談話 | しに文 | のに文 | 計   |
|------|-----|-----|----|-------|-----|-----|-----|
| 連＋に  | 6   | -   | 6  | 連＋に   | 67  | 14  | 81  |
| 終＋のに | -   | 3   | 3  | 終＋のに  | -   | 23  | 23  |
| 終＋ニ  | 4   | 2   | 6  | 終＋ニ   | -   | 6   | 6   |
| 計    | 10  | 5   | 15 | 計     | 67  | 43  | 110 |

表6：第3期の方言談話／共通語談話における分布

| 方言談話 | しに文 | のに文 | 計  | 共通語談話 | しに文 | のに文 | 計  |
|------|-----|-----|----|-------|-----|-----|----|
| 連＋に  | -   | 6   | 6  | 連＋に   | 31  | 7   | 38 |
| 終＋のに | -   | -   | -  | 終＋のに  | 5   | 22  | 27 |
| 終＋ニ  | 9   | 7   | 16 | 終＋ニ   | -   | -   | -  |
| 計    | 9   | 13  | 22 | 計     | 36  | 29  | 65 |

表 7：第 4 期の方言談話／共通語談話における分布

| 方言談話 | しに文 | のに文 | 計  | 共通語談話 | しに文 | のに文 | 計  |
|------|-----|-----|----|-------|-----|-----|----|
| 連+に  | -   | -   | -  | 連+に   | 40  | 2   | 42 |
| 終+のに | -   | -   | -  | 終+のに  | 1   | 37  | 38 |
| 終+ニ  | 12  | 14  | 26 | 終+ニ   | -   | -   | -  |
| 計    | 12  | 14  | 26 | 計     | 41  | 39  | 80 |

表 8：第 5 期の方言談話／共通語談話における分布

| 方言談話 | しに文 | のに文 | 計  | 共通語談話 | しに文 | のに文 | 計  |
|------|-----|-----|----|-------|-----|-----|----|
| 連+に  | -   | -   | -  | 連+に   | 13  | -   | 13 |
| 終+のに | -   | -   | -  | 終+のに  | -   | 9   | 9  |
| 終+ニ  | 10  | 6   | 16 | 終+ニ   | -   | -   | -  |
| 計    | 10  | 6   | 16 | 計     | 13  | 9   | 22 |

第 1 期から第 5 期に使用された非対応形の発話をいくつか挙げる（〔 〕内には必要に応じて共通語訳（意識）を、[ ] 内に談話番号（§ 3.3. 表 3 参照）を記す）。

＜「のに文」に「動詞連用形+に」を使用する非対応形＞

(18) ホテルに 行ギニ [ホテルに行くのに（電車を使った）] [OM8]

(19) で 羽田↑ あれ 品川さ 行ギニ 便利だよ、移動シニさ。[OM8]

(20) ん、あいがら すぐ、行ぐんだびょん、家さ 行って、旅行さ 行ギニ 支度要るべし、[あれからすぐ行くんだろうよ。家に行って、旅行にいくのに支度が要るだろうし] [MA3]

＜「しに文」に「動詞終止形+のに」を使用する非対応形＞

(21) みんなで、食べるのに 行ごー [OM5]

(22) 「寝でもいーよー」って ゆーがら、あだし、さっさど 上さ 寝るのに来て、[OM3]

(23) あの、スキー やるのに来て、なんが、ちょっと、固まってしまうがも分かんない。[OM13]

各時期について、表から分かることを挙げる。

＜第 1 期＞

(1) 方言談話では、伝統的な方言形である「動詞終止形+ニ」だけでなく、対応形

も使用する。§ 4.1.2. の方言訳調査では非対応形も使用する可能性があるとの内省を得たが、実際の談話では使用されていない。

- (2) 共通語談話では、伝統的な方言形である「動詞終止形+ニ」が優勢である（目的表現全体の65.2%）。
- (3) 共通語の形態に注目すると、対応形のみを使用しており、非対応形は見られない。

<第2期>

- (1) 方言談話の状況は、第1期と同様に、伝統的な方言形である「動詞終止形+ニ」だけでなく、対応形も使用する。非対応形は使用しない。
- (2) 共通語談話では、第1期に比べて伝統的な方言形である「動詞終止形+ニ」の割合が低くなる（目的表現全体の5.5%）。
- (3) 共通語談話において、「のに文」に「動詞連用形+に」を使用する非対応形を使用する。

<第3期>

- (1) 方言談話においても、「のに文」に「動詞連用形+に」といった非対応形を使用する。
- (2) 共通語談話では、「動詞終止形+ニ」が使用されなくなる。
- (3) 共通語談話において、第2期では見られなかった「しに文」に「動詞終止形+のに」といった非対応形を使用する。

<第4期>

- (1) 方言談話では、伝統的な方言形「動詞終止形+ニ」のみを使用する。
- (2) 共通語談話では、第3期と同様に「動詞終止形+ニ」は使用されない。
- (3) 共通語談話では、第3期と同様に「のに文」に「動詞連用形+に」を使用した非対応形、「しに文」に「動詞終止形+のに」を使用する非対応形を使用している。

<第5期>

- (1) 方言談話では、第4期と同様に、伝統的な方言形「動詞終止形+ニ」のみを使用する。
- (2) 共通語談話では、第3期・第4期と同様に「動詞終止形+ニ」は使用されない。
- (3) 共通語談話では、第3期・第4期で使用された「のに文」に「動詞連用形+に」といった非対応形、「しに文」に「動詞終止形+のに」といった非対応形を使用しなくなっている。

以上をまとめると、次の3点のようになる。

- (a) 共通語談話における伝統方言形と共通語形の取り換え  
第3期以降は、対応形と非対応形を使用し、伝統方言形を使用しない。つまり、形態としては共通語形のみを使用する段階へ移行している。

## (b) 方言談話・共通語談話における非対応形の使用と推移

## (b-1) 非対応形の使用開始時期

非対応形は、方言談話では第3期、共通語談話では第2期～第4期に使用する。§ 4.1.2.の方言訳調査での、実際に使用する場面では非対応形を使用する可能性があるとの内省に反し、第1期では方言談話・共通語談話のどちらでも使用されない。また、非対応形の使用は共通語談話が先行していることから、使用の要因が共通語談話にあることを示唆している。

## (b-2) 非対応形の推移

方言談話・共通語談話のいずれも、対応形使用→非対応形使用→伝統方言形のみ使用（方言談話）・対応形のみ使用（共通語談話）という過程が見られる。ここから、対応形を使用する段階から、非対応形という中間方言形使用期へ移行し、その時期を脱却して最終的に方言談話では伝統方言形専用へ、共通語談話では共通語形専用へと進む過程が観察される。

## (c) 方言談話での共通語形の使用

第1期・第2期の伝統方言形ともに対応形も使用する段階から、第3期以降の対応形を使用しない体系へと移行している。つまり、共通語形を使用する段階（方言形と共通語形の併用段階）から使用しない段階（方言形のみ段階）へと移行する。

以下、(a)の共通語談話における伝統的な方言形と共通語形の取り換え（§ 5.2.2.）、(b)の方言談話・共通語談話における非対応形の推移（§ 5.2.3.）、(c)の方言談話での共通語形の使用（§ 5.2.4.）について、個別に分析・考察する。

## 5. 2. 2. 共通語談話における伝統的な方言形と共通語形の取り換え

ここでは、表4～表8の共通語談話における伝統的な方言形「動詞終止形+ニ」と、共通語形「動詞連用形+に」「動詞終止形+のに」の切換えについて考察する。

表4～表8を伝統方言形と共通語形の分布からまとめ直すと、表9のようになる。表内の共通語形は、対応形／非対応形を合計した数値である。[ ]内に非対応形の使用数を示している。なお、表内の( )は各時期における目的表現全体に対する割合（縦の合計が100%）を示す。

表 9：共通語談話における伝統方言形と共通語形の分布

|       | 第 1 期        | 第 2 期             | 第 3 期  | 第 4 期 | 第 5 期 |
|-------|--------------|-------------------|--------|-------|-------|
| 共通語形  | 8<br>(34.8)  | 104[14]<br>(94.5) | 65[12] | 80[3] | 22    |
| 伝統方言形 | 15<br>(65.2) | 6<br>(5.5)        | -      | -     | -     |
| 計     | 23           | 110               | 65     | 80    | 22    |

表 9 から、次のことがわかる。

- (1) 伝統方言形は第 1 期から第 2 期にかけて使用の割合が低くなり、第 3 期以降は使用されない。
- (2) したがって、対応形・非対応形のどちらであるにせよ、形態としては共通語形式のみを使用する方向へと移行する。

つまり、共通語談話においては、方言と共通語を切換えようとする過程で、伝統的な方言形「動詞終止形+ニ」を使用せず、共通語の形態へ切換えることで、方言を抑制しようとしていると思われる。

しかしながら、共通語への切換えというスキルは第 4 期までは自動化されていない。会話という行為は、面接調査などに比べて個々の処理に対する注意が十分にはかけられないと考えられる。また、AK は共通語談話での自らの言語使用について、形態に注意を払いつつも内容の伝達により注意を払うといった内省をする。したがって、会話という場面では、統制的処理を行う時間的な余裕がなく、また内容の伝達により注意が払われることによって、AK が有する共通語能力が十分に活用されないことになる。

第 1 期では、対応形と伝統的な方言形の使用という方言談話の使用状況（表 4）を切換ええない（切換えられない）ことから対応形・伝統的な方言形を使用し、非対応形を使用しない。第 2 期以降ではこのような状況を共通語形のみを使用へと切換えようとするのである。しかし、共通語能力を十分に活用できないことから、§ 5.1.2. で述べたように、いわば臨時的なルールを利用することで非対応形を創り、使用することになるのだと考えられる。ここから、第 3 期以降で方言形が使用されなくなったことは、方言を抑制するというスキルが自動化された結果であると解釈できよう。

### 5. 2. 3. 方言談話・共通語談話における非対応形の推移

次に、非対応形の推移について考察する。図 2 は各時期の非対応形の割合を示したものである。

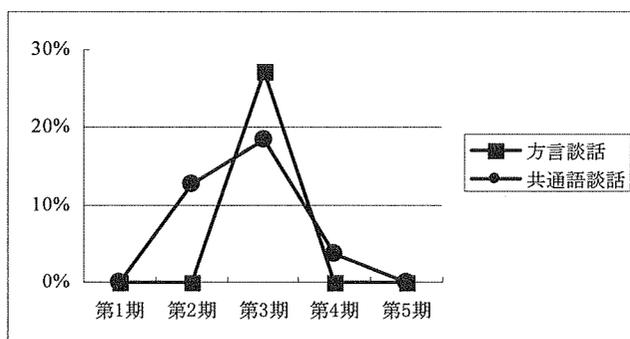


図2：非対応形の推移

図2のように、非対応形は第2期から第3期にかけて割合が高くなり、第4期で減少し、第5期で使用されなくなる<sup>3)</sup>。§ 5.2.1. で述べたように、第1期では伝統方言形が使用されているものの、共通語形式としては対応形のみである。したがって、AKの切換えは、対応形使用から非対応形使用へと移行（第1期→第2期・第3期）し、再び対応形使用へ向かい（第4期）、最終的に対応形使用に至った（第5期）と解釈できる。つまり、形態を切換えようとする過程で、共通語と同様の形態を共通語と同様の用法で使用する段階から、共通語形は使用するが用法が共通語とは異なるといった過剰修正<sup>4)</sup>の段階に入り、方言形と共通語形の対応関係に関わる規則的知識（rule-based knowledge）を実際に会話でも活用するというスキルの発達に至ったのである。会話という場面での形態と意味・用法の臨時的な対応関係（「のに文」に「動詞連用形+に」を使用し、「しに文」に「動詞終止形+のに」を使用すること）が再構成（restructuring）され、共通語表現の使用（「のに文」に「動詞終止形+のに」を使用し、「しに文」に「動詞連用形+に」を使用すること）へと向かった（＝スキルが自動化された）と考えられるのである。

ここで観察された移行の過程は、第一言語獲得や第二言語習得で見られるU字型行動（U-shaped behavior）と現象としては一致する。すなわち、targetと同様の形式を使用する段階から、中間言語体系へ再構成されることによって過剰修正された形式を使用する段階に入り（表面的には一時的な後退現象となり）、再び体系の再構成によってtargetと同様の形式を使用する段階に至るのである。

ただし、第二言語習得と、本稿で取り上げた切換えでは、U字型行動に至るメカニズムに違いがある。第二言語習得で見られるU字型行動では、チャンクを使用することでtargetと同様の形式を使用する段階があり、その後ルールなどを習得することによって過剰修正形を使用する段階へ移行し、そのルールをtargetと同様に活用できるようになることで最終段階に至る。しかし、AKはtargetに関するルールといった知識を、学校教育

やマスメディアの影響によって調査を開始した第1期の時点で既に有していたのである。つまり、第二言語習得では target のルールといった宣言的知識を習得する過程で過剰修正形を生み出すことがU字型行動を示すメカニズムであるのに対し、AKは既に持つ宣言的知識が手続化され、手続的知識へと移行する（＝スキルが自動化する）過程で過剰修正形を生み出すというメカニズムによってU字型行動を示すのである。宣言的知識が習得されていない段階から、スキルが自動化される段階までを一次元の過程で表すならば、第一言語獲得・第二言語習得における習得・発達開始点とAKの第1～5期は下図のように位置づけることができる。図中のFLAは第一言語獲得を、SLAは第二言語習得を指す。また、DKは宣言的知識（declarative knowledge）を、PKは手続的知識（procedural knowledge）を表す。

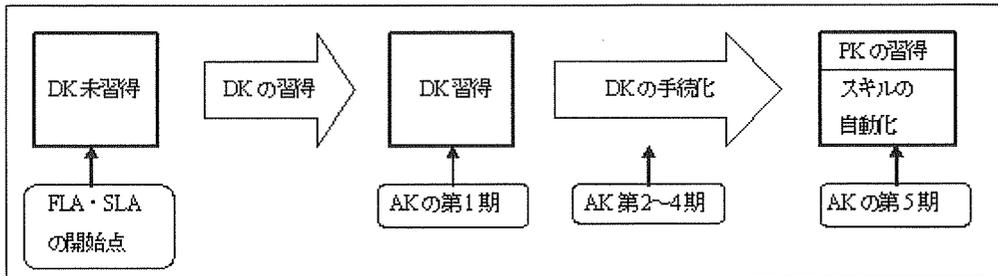


図3：FLA・SLAとAKの発達過程での位置づけ

以上から、AKが示したU字型行動は、第二言語習得のように宣言的知識を習得していく過程で見られるだけでなく、習得された宣言的知識が手続化していく過程でも現れることを示唆していると考えられる。

なお、「のに文」に「動詞連用形+に」を使用する非対応形はその多くが動詞「行く」の場合であり（29例中26例）、「行く」以外の動詞は「移動する」（3例）である。このように動詞が限定されるのは、「行く」などの移動動詞と「飲む」といった動詞に次のような違いがあるためであると考えられる（{ }内の左は共通語、右は方言を示す）。

(24) 酒を {飲みに／飲ムニ} 行く。 (しに文)

(25) 酒を {飲むのに／飲ムニ} 使う。 (のに文)

(26) ホテルに {\*行き（移動し）に／\*行ク（移動スル）ニ} 行く。 (しに文)

(27) ホテルに {行く（移動する）のに／行クニ} 車を使う。 (のに文)

(26)のように、しに文では述語が移動動詞に限られているために、節内の動詞は移動動詞が使えない。方言形「飲ムニ」は(24)(25)のように「飲みに」「飲むのに」のい

ずれにも対応するのに対し、(27) のように「行クニ」は「行くのに」にしか対応しない。しかし、「飲ムニ」が両者と対応することを「行クニ」にも適用することで、「行クニ」は「行キニ」とも対応すると類推し、「行キニ」を「のに文」で使用することを固定化したと考えられるのである。ただし、「のに文」でも対応形を使用する場合がある。この規則性については、頻度の低さもあり、現段階では課題としたい。

#### 5. 2. 4. 方言談話での共通語形の使用

最後に方言談話における共通語形使用について考察する。

表 4 から表 8 の方言談話における形式の分布をまとめ直したものが表 10 である。

表 10：方言談話における共通語形の分布

|       | 第 1 期 | 第 2 期 | 第 3 期 | 第 4 期 | 第 5 期 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 共通語形  | 10    | 9     | -     | -     | -     |
| 中間方言形 | -     | -     | 6     | -     | -     |
| 伝統方言形 | 4     | 6     | 16    | 26    | 16    |
| 計     | 14    | 15    | 22    | 26    | 16    |

表から分かることをまとめると以下のようなになる。

- (1) 第 1 期・第 2 期では伝統方言形も使用するものの、共通語形も使用している。
- (2) 第 3 期以降は共通語形を使用しなくなり、第 3 期の中間方言形・伝統方言形の併用期を経て、伝統方言形のみを使用するようになる。

(1)(2)から、方言談話においても共通語形を使用していた体系(第 1 期・第 2 期)を崩し、中間方言形と伝統方言形を併用する体系を構築する過程を経て、伝統方言形だけの体系へと収斂していくことが分かる。つまり、AK の目的表現は方言形と共通語形が混在した体系であったにも関わらず<sup>5)</sup>、方言と共通語を分離し、伝統方言形のみを使用へと向かうのである。

共通語形を使用していた体系をあえて非対応形を使用する方向へと移行させることは、§ 4.2.3. で述べた共通語談話において体系の再構成 (restructuring) を行ったことと関連していると考えられる。共通語談話の第 2 期において再構成された体系は、第 3 期に至って方言談話にも影響を与えたと考えられる。つまり、2 つの変種が相互に影響を与えながら発達しているのである。共通語談話の影響を受けながら方言談話が変容する段階 (第 3 期) から、§ 5.2.3. での共通語談話と同じ移行過程を辿るならば、方言談話でも対応形

の使用に至ることになり、共通語化されることになる。しかし、方言談話では「共通語」との対比が意識され、区別されることによって伝統方言形のみ体系へと移行し、一方、共通語談話では切換えというスキルの自動化によって共通語形のみ体系が完成するのだと解釈される。

### 5. 2. 5. 談話調査のまとめ

本節をまとめると、以下のようになる。

#### (a) 方言抑制の自動化

方言形と共通語形を切換える自動化に先立ち、方言を抑制する自動化の段階が存在する。臨時的なルールを基に方言でも共通語でもない表現を創り上げることによって、方言抑制の自動化が完了する (§ 5.2.2.)。

#### (b) 体系の再構成

AKの使用形式の推移は、U字型行動を示す。すなわち、共通語と同様の形式を使用する段階から、中間方言体系へ再構成されることによって過剰修正された形式を使用する段階に入り、再び体系が再構成されることによって共通語と同様の形式を使用する段階に至る (§ 5.2.3.)。

#### (c) 体系の相互作用と方言形／共通語形の切換えの自動化

方言形と共通語形の切換えが自動化される過程で、方言と共通語の両体系が相互に影響を与え合いながら、それぞれの体系を構成していく。最終的に、方言談話では伝統方言形のみ体系、共通語談話では共通語形のみ体系となり、切換えが自動化されることになる (§ 5.2.4.)。

次節では、本節での分析・考察を基に、AKの共通語切換え能力の発達モデルを提示する。

## 6. 共通語切換え能力の発達

本節では、§ 5. の分析・考察を基に、AKが方言と共通語の切換えを自動化していく上での、共通語切換え能力の発達モデルを提示してみたい。

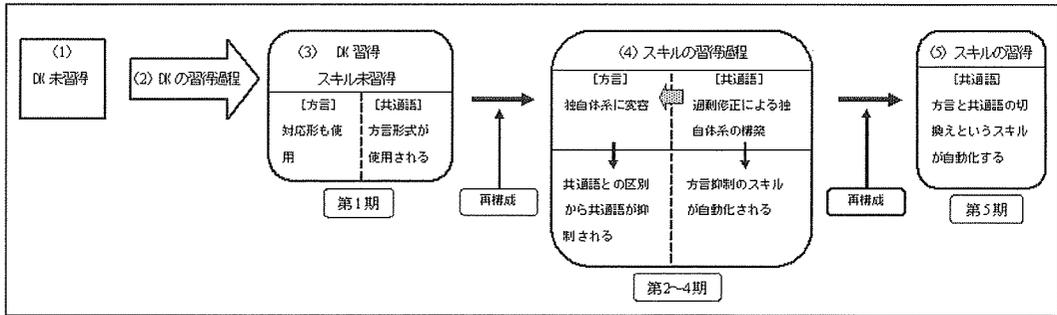


図4：共通語切換え能力の発達

共通語切換え能力の発達をモデル化したものが図4である（なお、(4)の「スキルの習得過程」において「共通語」から「方言」へ伸びる矢印は影響を与えていることを示す）。

共通語切換え能力（＝方言と共通語を切換えるスキル）が発達していく過程には、以下のような段階・過程がある。

(1) 宣言的知識（図中のDK）が未習得である段階

宣言的知識が習得されていない段階であり、第一言語獲得や第二言語習得の習得開始点となる。

(2) 宣言的知識を習得する過程

targetの知識を習得していく段階である。第二言語習得ではこの段階で過剰修正を行い、U字型行動を示すことがある。

(3) 宣言的知識が習得された段階

targetに関する宣言的知識が習得された段階である。ただし、実際の会話という場面で、方言と共通語を切換え、共通語と同じように形式を使用するスキルは習得されていない。AKの共通語談話・第1期はこの段階に位置づけられる。共通語へ切換えようとしながらも、方言と共通語を切換えるスキルが習得されていない／発達していないために、共通語談話においても方言形式が表出される時期である。この方言形式の使用を抑制し、共通語形式のみを使用することを目指すことで体系が再構成され、(4)の段階へと進む。

(4) スキルを習得する／発達させる段階

会話することを通して、方言と共通語を切換えるスキルを習得する／発達させる段階である。共通語談話では、体系を再編成した結果、過剰修正による中間方言形が使用され、AK独自の体系が創り上げられることになる。このことによって、方言抑制の自動化が完了する。その体系は方言にも影響を与え、方言談話でも中

間方言的な独自体系へと変容する。しかし、方言談話では、カジュアルな場で使用する方言を共通語と区別するために、共通語が抑制され、伝統的な方言形のみ  
の体系へと移行する。

(5) スキルが自動化した段階

スキルの発達を経て、自動化する段階である。方言の抑制というスキルが自動化された後、再び自らの体系を再構成し、共通語談話における方言形と共通語形の  
切換えが自動化される段階へ至るのである。

(4) には、伝統方言形と中間方言形の併用期から、中間方言形と共通語形の併用期への移行が見られる。したがって、方言抑制というスキルの自動化と、方言形と共通語形の切換えというスキルの自動化は、それぞれが独立した別々の現象ではない。全体としては、方言形と共通語形の切換えの自動化という過程があり、その過程の初期に方言抑制というスキルの自動化が位置づけられると考えることができる。

## 7. まとめ

本稿では青森県弘前市方言話者の目的表現の切換えから、方言と共通語の切換えにおけるスキルとその自動化、および共通語切換え能力の発達について分析・考察した。その結果、以下のことが明らかとなった。

(A) 方言抑制というスキルの自動化

共通語談話では、方言形と共通語形を切換える自動化に先立ち、方言を抑制する自動化の段階が存在する。臨時的なルールを基に方言でも共通語でもない表現を創り上げることによって、方言抑制の自動化が完了する (§ 5.2.1.)。

(B) 体系の再構成

方言話者・共通語談話における非対応形の推移は、U字型行動を示す。すなわち、両談話とも共通語と同様の形式を使用する段階から、中間方言形が使用される体系へ再構成されることによって過剰修正された形式を使用する段階に入り、再び体系が再構成されることによって共通語と同様の形式を使用する段階に至る (§ 5.2.2.)。

(C) 方言談話での共通語形の使用

方言形と共通語形の切換えが自動化される過程で、方言と共通語の両体系が相互に影響を与え合いながら、それぞれの体系を構成していく。最終的に、方言談話では伝統方言形のみ  
の体系、共通語談話では共通語形のみ  
の体系となり、切換え

が自動化されることになる (§ 5.2.3.)。

また、共通語切換え能力の発達に関しては、以下のようなモデルを提示した。

(D) 共通語切換え能力の発達とスキルの自動化モデル

宣言的知識 (図中の DK) が未習得である段階から、target の宣言的知識を習得する過程がある。AK の初期はこの段階を既に終え、宣言的知識が習得されているもののスキルは習得されていない段階にある。共通語へ切換えようとしながらも、方言と共通語を切換えるスキルが習得されていない／発達していないために、共通語談話においても方言形式が表出される時期である。この方言形式の使用を抑制し、共通語形式のみを使用することを目指すことで体系が再構成され、スキルを習得する／発達させる段階へと進む。共通語談話では、体系を再編成した結果、過剰修正による中間方言形が使用され、AK 独自の体系が創り上げられて方言抑制の自動化が完了する。その体系は方言にも影響を与え、方言談話も中間方言的な独自体系へと変容する。しかし、方言談話では、カジュアルな場で使用する方言を共通語と区別するために、共通語が抑制され、伝統的な方言形のみをの体系へと移行する。この段階を経て、再び自らの体系を再構成し、共通語談話において方言形と共通語形の切換えが自動化される段階へ至るのである (§ 6.)。

本稿では、方言話者が方言と共通語を切換えることをスキルと捉え、target に関する宣言的知識を習得する段階からスキルが自動化する段階までの過程のなかに対象とする話者の様相を位置づけた。この過程は、第二言語習得とも共通するものであると考えられる。第二言語習得研究には、target の知識を習得する過程の解明に焦点を置く研究、その知識が習得された後で、知識を活用できるようになること (=スキルが自動化していくこと) を解明する研究がある。本稿は後者について方言と共通語の切換え現象から、その過程を分析・考察し、知識の習得過程にみられる現象がスキルの発達過程においても観察されることを明らかにした。具体的には、以下のようにまとめられる。

- (a) 方言と共通語といった変種の切換えとその移行は、第二言語習得と同様に、スキルの習得・発達といった観点によって捉えられる可能性がある。
- (b) 第二言語習得において、知識の発達によって現れるとされる現象 (本稿では U 字型行動) は、スキルの発達過程においても観察される可能性がある。ただし、本稿で観察されたものと第二言語習得で見られる U 字型行動ではメカニズムに違いがあった。しかし、それは宣言的知識を習得する過程か、宣言的知識を習得した後のスキルを習得・発達させる過程か、という違いである。したがって、第

二言語習得においても、スキルを習得・発達させる過程でU字型行動が見られる可能性もある。

(a) はスタイル切換え研究、つまり、スタイルの違いを明らかにする研究について、スキルとその自動化という観点で分析を行う可能性を示したことになる。また、(b) については、宣言的知識の習得とスキルの習得に共通する／相違するメカニズムを明らかにし、「使える」ということの本質を明らかにする必要があることを提案したと考える。

最後に、本稿で残された課題についてまとめておく。まず、頻度などの問題で明らかにできなかった中間方言体系の規則性（非対応形がシステムティックなバリエーションであるか否か）について明らかにする必要がある。この非対応形は、AK 以外の弘前市方言話者に対する調査でも確認されている形式である。AK の資料と共に、他の話者のデータと合わせて分析する必要がある。この点と関連して、AK 以外の弘前市方言話者でも同様のスキルの自動化過程が観察されるのか、つまり、一般化が可能なのかといった点についても課題となる。共通語能力に差がある話者の分析に先立って、上記の (a) を明らかにするために、共通語能力が高い話者を分析し、そのスキルの自動化について分析していく予定である。ただし、その出発点は話者によって様々であろう。宣言的知識は習得されているとしても、調査開始時点におけるスキルの自動化の程度には差があると考えられる。したがって、複数の話者をグループとしてまとめて分析することに先立ち、個人の自動化の過程を積み上げながら、個々人の過程に共通する／相違する特徴をまとめることで解明していきたい。

## 【注】

- 1) 週の始めにトランプ大のカードが配られ、授業中はもちろんのこと、下校までに方言を使った者はそれを聞いていた人に自分のカードを渡す。週の終わりにカードが少ないものは掃除等の罰則が与えられるというもの。ただし、公的な記録は現存しない。AK は「嫌な思い出」と回想するが、AK が「嫌」なのは《方言の使用が禁止されたこと》や《方言を使用して罰を受けたこと》ではなく、《自分が共通語を使えなかったこと》であるという。このように、AK にとって「共通語を使用すべき」であると意識する場面では「共通語を使用したい（使用するべきだ）」という強い意識がある。
- 2) 当該方言では、本稿の分析対象である目的表現の場合（＝小林（2002）の「移動の目的－動詞接続」）、格助詞「サ」を用いた「見るサ」「見サ」は使用しない。
- 3) このような量的分布の違いは、§ 3.3. 表3 で示したように、時期として分類された談話の数に影響されている可能性も否定しきれない。この点については、§ 6. の今後の課題で述べるように、今後の調査において収録分量を考慮すること、また、他の話者のデータも参照していくといった課題が残る。

4) 次のような類推による考えられる。

「スーパーへ買い物 {スルニ/しに} 行った」という「しに文」から、「動詞終止形+ニ=動詞連用形+に」のような対応関係を得る。また、「これは野菜の皮を {ムクニ/むくのに} 使う」という「のに文」から、「動詞終止形+ニ=動詞終止形+のに」という対応関係を得る。つまり、伝統的な方言の「動詞終止形+ニ」は、共通語の「動詞連用形+に」「動詞終止形+のに」の両者と対応するのである。ここで「しに文」の場合は、以下のように「のに文」の対応関係のルールを適用することで非対応形を創り上げる。

動詞終止形+ニ=動詞終止形+のに：買い物をスルニ=X

X=買い物をスルノニ

また、「しに文」における対応ルールを「のに文」に適用するという類推によって、「のに文」の非対応形を創る。

動詞終止形+ニ=動詞連用形+に：皮をムクニ=X

X=ムキニ

5) 他の言語項目では、方言談話において共通形が使用されることは少ない。非津軽方言話者の発話を直接引用する場合や、数百例中 1、2 例だけ共通語形が使用されたといった場合を除けば、本稿の分析対象である目的表現と逆接の接続助詞「けど」の二項目のみである。この二項目において方言形と共通語形が混在する理由について、現在のところ答えを持ち合わせていない。

### 【参考文献】

- 小林隆(2002)「格助詞」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』科学研究費基盤研究(B)  
 (2)「文法体系のバリエーションに関する対照方言学的研究」研究成果報告書  
[http://www2.kokken.go.jp/~takoni/DGG/08\\_kakujoshi.pdf](http://www2.kokken.go.jp/~takoni/DGG/08_kakujoshi.pdf)
- 佐藤和之編(1993)『方言主流社会の方言と標準語 一棲み分けから共生へー』弘前大学  
 人文学部国語学研究室
- 前田直子(1995)「スルタメ(ニ)、スルヨウ(ニ)、シニ、スルノニ 一目的を表す表現一」  
 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』くろしお出版
- Anderson, J. (1983) *The architecture of cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Gawlitzeck-Maiwald, I. & Tracy, R. (1996) Bilingual bootstrapping. *Linguistics* 34: 901-926
- Kellerman, E. (1985) If at first you do succeed... in Gass, S. M. & Madden, C. G. (eds.) *Input in Second Language Acquisition*. 345-353, Rowley, MA: Newbury House.

- McLaughlin, B. (1990) Restructuring. *Applied Linguistics* 11: 113-128
- McLaughlin, B., Rossman, T. & Mcleod, B. (1983) Second language learning: An information-processing perspective. *Language Learning* 33: 135-158
- Paradis, M. & Genesee, F. (1996) Syntactic acquisition in bilingual children: Autonomous or interdependent? *Studies in Second Language Acquisition* 18: 1-25
- Paradis, M. & Genesee, F. (1997) On continuity and the emergence of functional categories in bilingual first language acquisition. *Language Acquisition* 6: 91-124

(博士後期課程学生)

(2005年9月2日受付)

(2005年10月13日修正版受付)

(2005年11月10日再修正版受付)

(2005年11月24日掲載決定)